

# SUPERBIKE EXPRESS

EXtra, EXpert and EXtreme

## 驚速のアジア王者デチャ、残念ながらレース2欠場 レース2は、再び山口のワンサイドレースとなるか!? 藤原、中富、岡村、小林など2位争いは激戦となりそうだ



オートポリスで全日本格式では、初めてとなる2&4レースがついに開幕した。全日本ロードレース選手権は、ST600クラスのみが開催され、4輪の最高峰フォーミュラ・ニッポンとの競演が阿蘇の雄大な自然をバックに行われる。

ST600クラスは、全日本ロードレースの激戦区と言われており、世界を経験したライダー、全日本チャンピオンを獲得したライダーも数多く参戦しており、世界的にもハイレベルなレースが繰り返されている。本来ならば、4月上旬に開幕していた全日本ロードレースだが、東日本大震災の影響で中止となったため、今回がST600クラスの開幕戦となっている。

注目は、1998年から世界を舞台に活躍、今シーズンはアジア選手権にフル参戦している藤原克昭が14年ぶりに全日本ロードレースにスポット参戦してきたことだ。藤原は、5月1日に行われたアジア選手権開幕戦でダブルウインを達成、その実力を見せつけただけに、今回もトップ争いに絡んでくることが予想された。

緒戦ということで木曜日から練習走行が設けられ、初日からデイレインディングチャンピオンの山口辰也が、コースレコードをコンマ5秒も更新する1分54秒8をマークする先制パンチを決めると、金曜日には、アジアチャンピオンのデチャ・クライサルが1分54秒9をマークし逆襲。レースウィークは、この2人を中心にセッションが進んでいった。

全日本ST600史上、初めてノックアウト方式で行われた公式予

選。これまでJSB1000クラスを戦ったことのあるライダー、チームは、ノックアウト方式は慣れたもの。それぞれ、一つでも上のグリッドを手に入れるため、Q1から各ライダーの駆け引きが始まる。オートポリスを得意とし、JSB1000クラスのコースレコードを保持している山口は、Q1ではただ一人、1分54秒台をマークし、レース1のポールポジションを獲得する。デチャは、2番手につけ、地元の岡村光矩が3番手と健闘し、ここまですべてコースレコードを更新。トップ3は、またもピレリタイヤユーザーが独占した。

ダンロップ、ブリヂストンとニュータイヤを投入したが、今回もピレリの優位は崩れていないようだ。24台が進出するQ2、12台が進出するQ3と進むと、デチャが1分54秒628という驚速タイムをマーク。一方、山口は、最後のセッションにコースインしようとした際、エンジンがかからないトラブルに見舞われる。何とか、エンジンは火を吹き返し、コースインしたが不完全燃焼のQ3となってしまふ。それでも2番手につけ、レース2は、デチャがポールポジション、山口がセカンドグリッドから臨むことになった。3番手には、やはり岡村が続き、レース1に続き、レース2も同じ顔ぶれがフロントロウに並んだ。開幕戦鈴鹿では、やはりフォーミュラ・ニッポンとの2&4

レースでJSB1000クラスが行われ、4輪タイヤのラバー(タイヤカス)が路面に乗ってくると、グリップが落ちる現象が起きていた。今回は、土曜日からフォーミュラ・ニッポンが走り始め、その影響が目撃されたが、溝付きのプロダクションタイヤを使うST600クラスは、それほど影響はなかったようだ。

土曜日に行われたレース1では、スタート直後に山口とデチャ、そして岡村が接触。デチャが転倒するアクシデントが発生する。デチャは、この転倒で右手小指の付け根を骨折。残念ながら、レース2に出場することができなくなってしまふ。レース1は、山口が独走で制しただけにレース2も、山口のワンサイドレースとなる可能性が高い。2位争いは、レース1同様、藤原、中富伸一を中心に激しいバトルになる可能性が高い。あとは日曜日の天気や気温が気になるところ。注目のレース2は、どんな結末が待っているのだろうか!?



レース1を独走で制した山口。レース2を2番手からスタートする

レース1を4位でフィニッシュ、レース2を3番手からスタートする岡村

練習走行から54秒台をマークし好調だったデチャ。しかしレース1で負傷。P.P.スタートのレース2を欠場することになった

### RACE 1 RESULT & REPORT 山口辰也が圧倒的な独走優勝! 2位争いは藤原克昭が制す!!

スタート直後に山口辰也とデチャ・クライサルが接触、さらに3番手グリッドの岡村光矩が接触し、デチャが転倒するアクシデントが発生。1コーナーへは、2列目6番手グリッドの中富伸一が真っ先に進入し、岡村光矩、小林龍太、山口の順で続く。

オープニングラップは、中富が制すが、2コーナーで小林がトップを奪う。山口も3番手につけ様子を伺うが、3周目の2コーナーで中富をかすすと、その勢いそのまま第2ヘアピンで小林のインに入るがクロスラインとなり、再び小林が前に出ていく。しかし、山口は、4周目のホームストレートから1コーナーで小林の前に出ると、ファステストラップとなる1分54秒750をマークし、2番手を1秒532も引き離して戻ってくる。山口は、続く5周目も1分54秒台をマークし、あつと言う間に独走体制を築いていく。

2番手争いは、小林を先頭に、岡村、中富、藤原克昭、津田拓也、佐藤裕児、関口太郎、渡辺一馬などが続き、集団を作っていたが、ここから藤原が順位を上げてくる。8周目には、この集団のトップに立ち、これに呼応するように中富も藤原の背後につける。中富は、藤原にプレッシャーをかけるが、藤原も譲らない。そして14周目のコース後半の上りのセクションで藤原をかかわして2番手に浮上する。しかし、続く15周目の1コーナーで再びすぐに藤原が前に出ていく。

トップを走る山口は、2位を10秒以上引き離す大差で優勝。2位争いは僅差で藤原が制し、中富、岡村、小林、津田、佐藤、渡辺、関口と続いてチェッカーフラッグを受けた。

#### ST600 決勝 レース1 [暫定]結果

●決勝レース1(16周) / Weather: 晴れ 21.3°C 44% Track: ドライ

Pos No.	Name	Team	BestTime
1	山口 辰也	TOHO Racing MOTOBOUM	30'56.877
2	藤原 克昭	M-TBEETKAWASAKI	31'08.507
3	中富 伸一	HITMAN RC甲子園ヤマハ	31'08.605
4	岡村 光矩	RSG☆フィーバー&ドリーム北九州	31'08.822
5	634 小林 龍太	MuSASHIRTハルク・プロ	31'11.980
6	12 津田 拓也	WestPower	31'12.036
7	11 佐藤 裕児	HITMAN RC甲子園ヤマハ	31'12.093
8	9 渡辺 一馬	KoharaRacing	31'12.610
9	13 関口 太郎	Team TARO PLUS ONE	31'17.281
10	73 浦本 修充	MuSASHIRTハルク・プロ	31'22.165
11	81 亀谷 長純	パーニングブラッドRT	31'22.994
12	391 酒井 大作	TEAM ZEN&プラスワン	31'26.764
13	99 岩田 悟	テルル・ハニービーレーシング	31'27.147
14	59 荒瀬 貴	グリーンクラブ能塚	31'27.381
15	62 横江 竜司	RT 森のくまさん佐藤塾仙台	31'31.833
16	39 宮崎 敦	デックラフトレーシング	31'35.758
17	71 伊藤 勇樹	DOG FIGHT RACING-YAMAHA	31'37.072
18	10 國川 浩道	HiRaNo.92R	31'37.847
19	82 原田 武人	グリーンクラブ能塚	31'38.149
20	7 稲垣 誠	伊藤レーシングGMD・アケノS	31'38.939
21	5 中山 真太郎	TEAML.nたろうwith KRT	31'39.159
22	31 手島 雄介	MotoMap SUPPLY	31'39.248
23	68 篠崎 佐助	SP忠男レーシングチーム	31'45.378
24	46 西嶋 修	SPA直入インスト&フィーバー	31'45.774
25	85 山浦 司	ZOOM R.T.	31'59.016
26	50 西山 尚吾	RSGレーシングwithフィーバー	32'07.782
27	76 清水 直樹	EXPRESS Hou You	32'08.496
28	56 徳島 康則	UENO R&D BENGAL's	32'09.704
29	86 上野 太輔	MST TAMITON-R	32'27.675
**** 以上チェッカー ****			
30	37 田中 浩哉	グリーンクラブ MOTOBOY	27'56.496
31	64 矢田 栄一朗	TeamARA虎の穴	28'54.131
**** 以上完走 (12Laps) ****			
44	川嶋 恭史	RSGレーシングwithフィーバー	22'02.822
21	岩崎 哲朗	RS-ITOH&ASIA	13'44.360
75	谷口 和英	チーム ライダーズ コア	12'38.879
46	相馬 利胤	BMS-R&HIE-R&WM	10'19.657
24	井上 哲悟	RS-ITOH&FAST	8'01.876
77	深津 拓真	チームスガイレレーシングクラブ	8'03.439
74	北折 淳	Honda緑陽会熊本レーシング	8'04.170
20	Decha Kraisart	Yamaha Thailand Racing Team	スタートのみ
38	太田 達也	グリーンクラブ能塚&R・P-With	出走せず
47	白木 晶夫	グリーンクラブ能塚	出走せず
28	医王田 章弘	RS-ITOH&ASIA	出走せず

※6月4日(土)17:19現在の暫定結果です。



#### RACE1 WINNER 山口 辰也

TOHO Racing MOTOBOUM

「スタートでデチャ選手と接触してしまい、デチャ選手のハンドルがボクに引っかかってしまった。ボクは運よくレースを走れたのですが、デチャ選手が転倒してしまい、バトルをしたかったので残念です。予選よりも決勝の方が、涼しくなってきたので、ピレリタイヤに合ったコンディションでした。タイヤは、すばらしいですね。まずはレース1で勝ってホッとしました。どんな状況でも手を抜いて走ったことはないですし、レース2も全力で勝ちにいきたいです。応援してくれるスポンサーを始め、優秀なメカニック、すべてに感謝したいです」

#### RACE2 POLE POSITION INTERVIEW

アジア王者デチャ 1'54.628のレコードタイムでP.P.獲得!!



#### Pole Position Decha Kraisart

Yamaha Thailand Racing Team

「オートポリスは、アジア選手権でも走っていますし、アップダウンがあり、とてもエキサイティングなコースですね。公式予選では、予想以上にタイムが出たので、とてもうれいですね。レースでは、ベストを尽くすだけです」(コメントはノックアウト予選終了時のもの)

※デチャ選手は、レース1のアクシデントで右手小指付け根を骨折。帰国して手術を受けることになりました。

#### 全日本ST600クラスに『SGチャンギ賞』を設定!

2012年、シンガポール初の本格的サーキット『SGチャンギ モータースポーツハブ』がオープンします。アジアのモータースポーツのハブとしてMotoGP等の世界選手権の開催はもとより、日本のレースとの連携が計画されており、4輪ではスーパーGTやフォーミュラニッポン、2輪では全日本ロードレースが候補に上がっています。その『SGチャンギ モータースポーツハブ』を日本の皆様へ知っていただくことと、アジアと日本のモータースポーツの振興を目的に、全日本ロードレース選手権シリーズST600クラス(全5戦/6レースおよび第5戦併催アジア選手権SS600クラス/2レース)に『SGチャンギ賞』を設けていただくことになりました。

